魔砲使い転生

1億36度

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔砲使い転生

【Ｎコード】

Ｎ４７４７Ｚ

【作者名】

１億３６度

【あらすじ】

朝目が覚めたら周りは俺の部屋じゃなく、周りが真っ白で目の前に神様が！！

なに、俺死んだの？えっ転生してみないか？マジで！？喜んで！転生します！！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・前世で家族が居ない主人公がマイナーかもしれない力をもらってネギまに転生する話です。

作者には文才が欠片もありませんが生温かい目で読んでください。
感想はあまりキツイのは止めてください。

転生？喜んで，ただチートは下さい。（前書き）

生温かい目で見てください。

転生?喜んで，ただチートは下さい。

ジリリリリリリリ！　　ガシャ！！

「眠い・・・もう一回寝よう」

「これ、おきなさい、これ、おきなさい」

ううん、誰だよ俺起こすなんて家は両親他界してるから誰も居ないと思うんだが。

「むむ、しぶとい、こうなれば最終手段じゃパパラッパッパパースタンガン～」

「まてい！！」

不穏な発言を聞いて俺は飛び起きた、目の前にはスタンガン片手に持った、ダンブルドア

「おお、起きたか」

「誰だ！爺さん心臓止まるかと思ったぞ！！」

マジで止まるかと思ったわ！

なんだ、人起こすのにスタンガンって！

「まあまあ、落ちつけ青年よ」　バチチチッ

「落ちつけるか！！つーかスタンガンしまえや！」

それ、起こす目的で出したんじゃないのかよ！

「おお、そうじゃったそうじゃった」

そう言いつつスタンガンをしまうダンブルドア。

「で、お宅誰？」

「わし？わしは神じゃ」

「爺さんボケが進行していたんだな、うんうん大丈夫だ病院に行こう、付き添ってやるから」

「ええっわしボケてないんじゃが」

「じゃあ素で言ってんのか」

「うむ、わしは神じゃ」

「精神が逝っちゃてんのかな？」

「ぬお、もっとひどくなっておる」

「よし、爺さん俺が病院ｎ「そおい！」バチチチ、ぎゃあああ！」

「痛ってええー、爺さん何するんだ！」

スタンガン本気で当てたよ、この神！。

「お主と話しておると無限ループに陥りそうじゃから、わしが一人で話させてもらうぞ、まず最初にお主は死んだ、でそれを偶々わしが見ていた、それでお主転生してみんか？という訳じゃ、何か質問は？」

「マジで？」

「おおマジじゃ」

「神とはあなたの事ですか」

「最初から言っとるじゃろう」

「チートくれるのか？」

「まあ、あんまりだったらわしが止めるがな」

じゃあ、チート過ぎないチートだったらいいのか。

「それじゃ神様、魔砲使い黒姫の技量をくれ、んで魔力を使わなくても魔砲弾が作れるようにしてくれ、それと断罪者(ジャッジメント)を追尾なし能力で速射技能と弾数無限にしてくれ、それとトライピースのベリアルさんの肉体スペックをくれ」

「ふむ良いじゃろう、おまけで劣化しないようにしてやるわい、肉体も技量もな」

「マジか、ありがとう神様」

「容姿はどうするかの」

「それはどうでもいい。」

「ふむ、ではこちらで決めよう。」

ズドンッ

「うおっ」

後から音がしたので慌てて振り向くとデカイ扉があった。

ギギギーー

「転生先は干渉出来んからランダムじゃ、何処に行くかはわしもわからん、では行って来い」

「ああ、言ってくる」

俺は門を通る、中は真っ暗で光の道が一本あるだけだった。

「これを通ればいいんだな」

しばらく歩いていると光の道の終わりが見えた、潜り抜けると意識が飛んだ。

「良かったですね、元気な赤ちゃんですよ」

「ああ、私の可愛い子」

こうして俺の第二の人生が始まった。

主人公ステータス（前書き）

主人公は攻撃特化型です。

主人公ステータス

主人公ステータス

主人公の前世は普通の人、ただ、もしも銃を持つ事が有ったら絶対英雄になれていたぐらい射撃にだけ才能がある、転生したので魔力・気、両方とも有るが魔力は初級呪文の火よ灯れを唱えただけで枯渇、気も同様で身体強化に使っても1秒もたたず枯渇する。
性格は基本初対面の人から一目で温厚と断言されるほど温厚、ただし切れると手の付けようが無い程暴れる、結構嘘つき、戦闘方法は正義の魔法使いから見たら卑怯と絶対言う戦い方をする。
容姿はスティル・マグネスの赤髪じゃなく黒髪、刺青もピアスもしていない。

筋力　EX

俊敏　B

耐久　C

魔力　E－

幸運　B

宝具

断罪者（ジャッチメント）ランク　A

神様からもらった、クロス・マリアンの断罪者（ジャッジメント）の形をした、魔砲銃、神様に頼んで
弾数無限と連射技能をもらった、普通弾の威力はバレットＭ８２Ａ１と同じ。

八咫烏（やたがらす）ランク　Ａ＋
砲式～と名のつく魔砲弾を撃ちだす事が出来る銃、普通の魔砲弾も撃てるしかし黒姫の様に玄武や青龍の加護を受けている訳ではないので砲式（ホウシキ）　氷鎧牙龍弾（ヒガイガリダン）などは撃てず、実質撃てるのは砲式（ホウシキ）　青鎧龍弾（セガリダン）と普通の魔砲弾だけである、これも弾数無限で連射可能、普通の弾の時の威力はバレットＭ８２Ａ１の三倍、外見は火縄銃の士筒（さむらいづつ）

神父服

見た目はステイル・マグネスの服、ホルスター付き。

復讐の大剣（グレンデル）　Ａ＋＋

これも神様が勝手につけた武具、真名解放すると黒い閃光を放つ、威力的にはセイバーのエクスカリバーと同程度、ただし主人公の魔力も気も使用しないので外気を取り込んで放つ、丸一日使用しないで一発分、最大１０発分まで外気を溜められる、もちろん十日かかる、外見は全長六メートル持ち手は一メートル、片刃で刃幅３０ｃｍの肉厚の剣、復讐の大剣（グレンデル）の名に恥じない程、威圧感がある、重量は６００ｋｇ、しかし筋力がＥＸの主人公にとって持った感じは空のペットボトルと同レベル。

財宝の門　Ｂ

右手の平に菱形の中に菱形が入ったマークがある、取り出す物を想像しながらＯＰＥＮと言うと武具が光の粒子となって装着される、見た感じ光に包まれてる、しまう時はＣＬＯＳＥと言うとしまえる、なお普通の物でも収納可能。

スキル

高速魔砲弾作成　Ａ＋＋

文字どうり黒姫の技量を得た事によって出来たスキル、使用頻度が高いと龍の魔砲弾すら練成陣を書く必要が無くなる。

戦闘続行　Ａ

瀕死でも戦闘を続ける能力、クーフー・リンの様に戦闘の仕方が由来になったのではなくて、朝起きない、しぶとさから神様が付けた。

我衰える事なし　Ａ

肉体も技量も衰えない能力、肉体は２２歳で老いが止まり、一年間動かなくても筋力なども全く衰えない。

黄金律　Ｂ

小金持ち程度にならギャンブルするだけで働かなくてもなれる。

主人公ステータス（後書き）

ちなみにステイルさんの容姿になった理由は断罪者⇒持ち主クロス・マリアン⇒不良神父⇒ステイル・マグネスという連想ゲームでなりました。

装一弾（前書き）

主人公の名前は柊（ひいらぎ）・戒（かい）です。

装一弾

どうも、現在孤児院にいます、どうして孤児院に居るのかって？

それは俺が産まれてから1年位たった時に、俺の両親が俺を連れて行ったデパートで起きたテロに巻き込まれて死んでしまったらしい、断言できないのは、産まれてから一瞬だけ意識があったがそれから無くなって5年たった先週にまた目覚めたんだ、だから断言できない。

あっ、ちなみに意識が出来たと同時に能力の使い方もここが何処の世界なのかも全部わかったんだ、色々頼んでない物が入っていたのには驚いたけどな。

「戒君～お客さんよ～」

「わかった、園長先生、今行くー」

それに両親がいなくなったのは悲しいけど孤児院の皆や先生たちのお陰で全然さびしくないしね。

「んで、園長先生誰が来たのさ？」

「あなたを引き取りたい、って言ってる人がいた事は一か月位前に言ったわよね？」

「覚えてない」

「即答！？」

だって、俺一週間くらい前からの記憶しかないから覚えてないし

「15回も話したのに、まあいいわ、その人が来たのよ」

「なるほど〜」

しかし俺よ、十五回も聞き返すってもはや嫌がらせの域だな。

「それで、会ってくれる？」

「了解、会ってみる」

それで現在俺を引き取りたいと思っている人の前、その人が口を開いて。

「唐突だけど僕の息子になる気はあるかな？」

「あります！！」

「「即答！？」」

「だってこの人、良い人そうなんだもん」

「そんな理由で！？」

うわっ園長先生ひで〜俺の一秒で考えた理由をばかにしやがった

「いや、でもいいのかい？」

「えっ悪いの？」

「いや、僕としては良いんだけど」

「それじゃ良いじゃないですか」

「ささ、園長先生は放っておいて、まず自己紹介から始めましょう」

「まず僕から言いますね、僕は柊戒（ひいらぎかい）といいます、趣味は読書で、好きな物はチャーハンで嫌いな物はゴーヤです」

「ええーと僕は藤堂　真（とうどう・しん）って言うんだ、趣味は音楽鑑賞、好きな物は焼肉、嫌いな物はシイタケかな」

「それじゃ、よろしくお願いします」

それから園長先生が割り込んで来て書類やらなんやらの細々したあと、真さんと家に帰った。

以外にも真さんの家が豪邸だったのは驚いた、それと真さんは麻帆良の教員だそうだ、この家からして夜の警備員もしているんだろう。

ちなみに俺を自分の息子にしたのは寂しかったからだそうだ、でも真剣に息子として君を愛すよと言っていた。

そして明日から俺は麻帆良幼稚園に転入することになった。

装一弾（後書き）

次回から幼稚園の話を飛ばして小学校の話にいきます。

真さんの外見はコードギアスの朝比奈さんです。

装二弾（前書き）

今回は主人公にパートナーが出来ます。

装二弾

小学1年生になったある日、俺は義父さんに呼び出された。

コンコン　「入るよー」

「いいよー」

ガチャ　俺は部屋に入り義父さんが座っている椅子に向かい会った椅子に座る。

「んで、義父さん大事な話って何？」

「うん、実はね・・・・・・・・父さん魔法使いなんだ。」

「知ってたよ」

「うん、信じてもらえない・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・えっ今何て言った？」

「だから知ってたよって」

というか随分沈黙がながかったな。

「知ってた？ええっどうして？」

「えっだって身体能力とか異常の一言じゃん」

そう、我が義父さんは普段から魔法か何かで身体強化していたので

普通にわかった、しかも家でバーベキューしてた時、火が消えたからって普通に、プラクテピギナル火よ灯れって唱えてたじゃないか。

「そうか、驚かせたっかたんだけどな―、残念」

そう言って義父さんはうなだれる

「う～ん、じゃあ話は早いかな？僕は基礎以外の魔法が使えないんだ、代わりに我が藤堂家は生涯を共にするパートナーを生み出して共に戦闘したりするんだ。」

そう言いながら義父さんは真っ白な六亡星が書いてある真っ黒なカードを取り出して二人の間にあるテーブルの上に乗せる。

「これが僕の契約カード、それで召喚の仕方はこのカードを破くんだ。」　ビリッ

言い終わると同時に真っ二つにそのカードを引き裂いた、するとカードが黒い煙になって人の形をなしていった。

「これが僕のパートナーの刃（じん）だ。」

「お初にお目にかかります息子殿よ刃と申します」

「あーよろしく？」

「うむ、よろしくお願い申す」

「で？」

「でって何が？」

「いや、結局何がしたかったのさ」

そう、大事な話があると言われて俺は来たのだ。

「あ！忘れるところだった、危ない危ない」

義父さんよ、呼び出しておいて自分で要件を忘れかけるってどうなのよ。

「ええ～っとね、それで戒君も作らない？自分のパートナー」

自分だけのパートナーか～どうしようかな～よし決めた。

「義父さん、俺も自分のパートナーを作るよ」

「そうかそうか、いやー良かったよ子供に教えていかなければならないのに、拒否されたら僕の代でこの技術が断絶するかとおもったよ」

あれ？それって意外と重要な話じゃないか？

「ささ、そうと決まったら早く儀式の場所に行こう」

「儀式の場所って何処なの？」

「地下室だよ」

時飛んで地下室

「このカードに血を垂らして〔我ここに我が盟友となるものを求む〕って言えば出てくるよ」

うわ、召喚のセリフ滅茶苦茶厨二病じゃん、恥ず！

「恥ずかしいかもしれないけど頑張って！」

「は～い」

俺は指を強く噛み血を出す、そしてその血を真っ白なカードに垂らす。

「ええ～っと〔我ここに我が盟友となるものを求む〕」　シーン

地下室は水を打った様に静かになった、うわっ恥ず、俺超恥ずと思っていると突然カードが発光し人型になっていった。

光がおさまるとそこにはショートの黒髪で少し吊り目の整った顔立ちで革ジャンにジーパンをはいた女の人がいた。

「私を呼んだのは旦那かい？」

「えーとそうです？」

「そうかい、じゃあ自己紹介から始めようかね」

「まず、私の名前は縁(りょく)特技は転移と遠見と念話、これからよろしく」

「ええーと僕の名前は藤堂　戒ですよろしく」

「うん、じゃあ用事があったら呼び出してくれ」

緑は煙になってカードになった、そのあと義父さんにパートナーおめでとう、と言われてから寝た。

ちなみにカードの外見は金色の十字架が書いてある、真っ黒なカードだった。

キャラステータス

刃（じん）

外見はギザミフル装備〔剣士〕に鉄刀を装備した感じ
身長１８９ｃｍ

結構強い　具体的にはタカミチの半分ぐらい

戦闘スタイルは真が後衛で魔法の射手で攻撃、刃が太刀で前衛を担当する

緑（りょく）

外見はショートの黒髪で少し吊り目の整った顔立ちで革ジャンと白シャツにジーパン
身長は１７８ｃｍ・Ｂ９０・Ｗ５６・Ｈ８５

戦闘スタイルは完ぺきに支援タイプで遠くから遠見で戒の周りを３６０度全て見て念話で教える自分のところに敵が来たら転移で逃げまた遠見を再開する。

本人は戦闘がからっきしダメなので気配などが探れない戒とは最高の組み合わせである。

装二弾（後書き）

なんかどんどん主人公が強くなってる気が・・・・・・・・・・・・・・・・・

まあそれは置いといてだれか感想を下さいお願いします。

装三弾（前書き）

主人公の原作知識が段々薄れていきます。

念話は［　］このカギカッコです

裝三弾

ある日、俺はまた、義父さんに呼び出された。

「なあ、緑～俺が呼び出される理由ってなんだと思う？」

［さあ？旦那がなんかしたんじゃないんですか？］

「そう言われてもなぁ～」

［なに、言ってんですか、学校であれだけ問題起こした癖に］

問題って言っても学校の先生のかつら外したり、学校にお化け屋敷みたいなメイクして行ったりした、だけだと思うんだが。

［それが問題なんだと思うですがね］

「そこまで問題じゃないだろ」

［いやいや、そこが問題なんですって］

「ええ～嘘～」

［いやいや嘘じゃないですって］

［とりあえずドアを開けると同時に謝ったらどうですか？こうごめんなさい！！って］

「ええ～それってさ、もし違ったら俺自爆じゃね？」

［まあ、それも仕方ないですよ］

「それって仕方ないのか？」

なんて会話〔傍からみたら独り言〕をしているうちに着いた、義父の書斎の前、仕方が無い早く入って謝ろう。

「失礼します」

「ああ、良くき「ごめんなさい！」・・・・は？」

「いやいやいやいや、なんでいきなり謝ってるの？」

「えっ学校の事で怒られるんじゃないの？」

「学校でなんかしたのかい？」

「あれ違ったの？」

「まあ、いいや後でその話は聞くとして」

ギャー怒られる～、我が義父は普段は優しい人なのだが怒ると八時間くらい正座で怒られるのだ。

［ああ～旦那どんまい］

「緑もだからね」

［ええっそんな～～］

「まあ、それとは別に戒君に会わせたい子がいるんだよ、会ってくれれば学校での事の追求を止めよう」

っと恐怖に震えていた俺に救いの手が差しのべられた

[これは乗るべきですよ旦那！]

「もちろん喜んで会うよ！」

「そうかい、じゃあ明日、遊園地に行くからその子と仲良くしてね」

「了解」

翌日

〜車の中〜

「ああ、そうそうその子は裏の関係者じゃないからね」

「そうなんだ」

「うん、だから緑と話してたら可愛そうな者を見る目で見られるから気をつけてね」

「了解」

俺も初対面で可愛そうな子扱いされたくない。

[じゃあ、私暇になるんで寝ときますね]

「そうしといてくれ」

「緑はなんて？」

「寝とくんだって」

「そうかい、んっ着いたよ降りて」

「は～い」

そう言われて俺は義父さんと共に車を降りる。

「あの子が今日一緒に遊ぶ事になった人だよ」

と義父さんが顔を向けて言う、俺もその方向に顔を向ける、な～んか見た事ある顔だな～、まあいいか

義父さんが歩いて行ったのでついていく。

「こんにちは、お父さんから話を聞いてると思うけど僕が藤堂真でこの子供が僕の養子（むすこ）の藤堂戒だよ」

「はっはい、よろしゅうお願いします」

「よろしく、ほら戒も自己紹介しなさい」

「あいよ、今聞いた通り俺の名前は藤堂戒、戒って呼んでくれよな、よろしくな」

「うん、よろしく戒君、うちの名前は和泉亜子、好きに呼んでくれてええよ」

「そんじゃ亜子で」

「いきなり呼び捨てるんやな～」

「まあ、それも長所の一だと思ってくれ」

「それじゃあ、お互いの自己紹介もすんだ所で遊びに行こうか」

それから皆で遊んだ、射的で亜子が見かけによらず運動神経が良い事が判明した、それとジェットコースターで叫んでる亜子が可愛いと思ったのは内緒だ、ちなみに家に帰って原作キャラだった事を思い出して叫んだ俺は悪くないと思う。

ｓｉｄｅ真

今日は僕の知り合いの娘さんに息子を会わせた、仲良くしてくれるかどうか心配だったけど仲良くなってくれたのはとてもうれしかった、ただ気になったのは家に帰ってしばらくした後、戒君が「あああーーー原作キャラだったーー」と突然叫んだのには精神科に連れて行こうかと思うぐらい心配した。

ｓｉｄｅ亜子

今日はお父さんの知り合いっていう人とその子供に会う事になって
もうた、ちゃんと挨拶とか出来るやろか、その子は怖い子やろうか

と、そんな心配をしながら待ってたらやさしそうな大人の人がこっちに来て

「こんにちは、お父さんから話を聞いてると思うけど僕が藤堂真でこの子が僕の養子(むすこ)の藤堂戒だよ」

「はっはい、よろしゅうお願いします」

って挨拶して真さんが息子さんに自己紹介をするように言うて

「あいよ、今聞いた通り俺の名前は藤堂戒、戒って呼んでくれよな、よろしくな」

よかった〜フレンドリイな子や〜と思いつつ

「うん、よろしく戒君、私の名前は和泉亜子、好きに呼んでくれてええよ」

て自己紹介しながら私の事なんて呼ぶんやろと思っとたら

「そんじゃ亜子で」

なんて即答してきたのに驚いて

「いきなり呼び捨てるんやな〜」

って聞くと

「まあ、それも長所の一だと思ってくれ」

って言われたからいいな～長所て思ってたら真さんが

「それじゃあ、お互いの自己紹介もすんだ所で遊びに行こうか」

と切り出してきたから遊びに行った

それから射的で戒君が

「当てられるのか？」

って聞いてきたから

「こういうのは得意なんや」

って答えて４発中３発でお菓子をもらってどやって顔で見せつける

と戒君は笑って自分のお金を使ってコルク銃を一個貰って

「どれか一個好きなの指さしてみなさい、この射撃の名人が取って

みせようはっはっはっ」

言うたから一番大きなクマのぬいぐるみを指したった、

「さすがに取れんやろ」

言うたら戒君が

「射撃に関して私に不可能はない！！」

とやる気に満ち溢れた顔をしてコルク銃を構えて

ポポポポン

て音と共にとってもうた・・・・・

「って今連射しとらんかった!?」

今完ぺきに連射し取ったよな!?って聞いたら

「幻聴だ!!」

と、とっても良い笑顔でサムズアップされた

「いやいやいやいくらなんでも幻聴はないやろっ」

「まあまあ、細かい事放って置いて、さあ優しい優しい戒君からのプレゼントだ」

「いやいやいや「プレゼントだ」いや「プレゼントだ」い「プレゼントだ」・・・ありがとう」

結局戒君の有無を言わさぬ迫力に私は追求できずにプレゼントを受け取った、それからいろんな乗り物に乗った、ジェットコースターに乗った時、私が悲鳴をあげてる姿を見て戒君が微笑んでいたけん理由を聞こうとしたらはぐらかされてしもうた、帰り道で戒君から貰うたクマのぬいぐるみを抱いて

「また会えるかな?」

って戒君に聞いたら

「おんなじ学校だし会えるだろ」

と言われたので心の中で明日お昼ごはんを食べに誘おうと思ったのは内緒や。

装三弾（後書き）

真さんのｓｉｄｅが短いですね、あと亜子さんフラグが立ちました、まあ、それは置いといて何か感想かアドバイスを下さい。

装四弾（前書き）

さらに原作キャラと出会います。

目も当てられないほど駄文です。

装四弾

翌日

小学校・昼休み

「戒君ーお客さんだよ」

「はい？」

誰だ、俺他クラスに知り合いなんていないぞ

「和泉亜子さんだって」

瞬間、男子生徒の視線が背中に突き刺さる、・・・・・・・それより亜子ってそんなに人気だったの？ッて言うか君たちまだ小学生でしょうよ、ませるのが早いよ。

などと考えながら知らせてくれた女性徒Ａのもとに行く、・・・・・・・・・・・・・・・後に殺気混じりの男子の視線や同じく男子の「処刑処刑処刑処刑」やら「異端審問にかけねば」という知り合いＡとＢの声を聞きながら、というより知り合いＡ・Ｂよ、お前らそんなに危ない奴だったのかよ。

女性徒の元に着くと「春だね！」と良い笑顔で去って行ってしまった、訳がわからん。

「戒君、お昼ご飯一緒に食べへん？」

「ＯＫだ」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「即答！？」」」」」」」」

」」」」」」」」」」

おおう、クラスの団結力がよろしい事で、それよりさりげなく緑まで混じるなよ

「ほな、屋上に行こう？」

「あいよ」

現在屋上まで移動中

「なあ、亜子？」

「なんや？戒君」

「今日って二人だけなのか？」

「ちゃうよ、裕奈が来るで」

マジかよ、これ以上原作メンバーと関わったら原作無視は無理だな、まあ裏方で関われば良いか。

「どしたん、いきなり唸り始めて」

「いや、考え事していただけ」

「そーなん」

と話していると屋上の扉に着いたので扉を開いて入る

「まだ誰もおらんな」

「一番乗りだな」

目の前に広がる青空、前世も含めて思うけどやっぱり良いね！屋上

「にゃはははごめーん遅れたー」

そう思ってると裕奈が来た

「裕奈遅かったなーどないしたん」

「先生に廊下で走るなって怒られちゃって」

「そりゃ災難やったなー」

「それより、そこの人は誰かなー」

「今日話したやん、裕奈」

「ああ、亜子と一緒に遊園地いった人か～」

「ああ、そうだよ一緒に遊園地に行った人だ、名前は藤堂　戒だよろしくな」

「にゃはは明石裕奈だよ、よろしくー」

「ほな、自己紹介も終わったところでお昼ご飯食べようか」

それからは一緒にご飯を食べた。

ｓｉｄｅ裕奈

一時限目の十分休みに亜子が声をかけて来た

「なあなあ裕奈今日のお昼休み空いとる？」

「空いてるよ」

「えーっとなあ、この前一緒に遊園地に行った男の子をお昼ご飯に誘おうかと思うんやけど、二人きりやと恥ずかしいから一緒に来てくれへん？」

「いいよー」

「ありがとー」

「にゃはは別にいいよ」

と約束したので

お昼休みに屋上に向かって走っていると後ろから

「こらー明石ー廊下は走るなと何度も言うとるだろうが！！」

と先生に怒られてしまった、それで遅れてしまったから怒ってないと良いんだけど

「にゃはははごめーん遅れたー」

「裕奈遅かったな―どないしたん」

良かった怒ってないみたい

「先生に廊下で走るなって怒られちゃって」

「そりゃ災難やったな―」

「それより、そこの人は誰かなー」

優しそうな男の子を指しながら言う

「今日話したやん、裕奈」

「ああ、亜子と一緒に遊園地いった人か～」

「ああ、そうだよ一緒に遊園地に行った人だ、名前は藤堂　戒だよろしくな」

私は挨拶を返す

「にゃはは明石裕奈だよ、よろしくー」

「ほな、自己紹介も終わったところでお昼ご飯食べようか」

それから一緒にご飯を食べた、その時もしかすると私は戒君にいつか惚れるかもしれないとその時私は思った。

装四弾（後書き）

無理やり感がプンプンしますね、まあ、それは置いといてあと二・三話で原作に入ります。

感想・アドバイスお待ちしています

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4747z/

魔砲使い転生

2011年12月27日00時49分発行